

アビダルマ仏教における bhājana-loka について

広瀬 智 一

仏教宇宙論の基本的構想は『俱舍論』第三世間品に独立して提示され、これに基づいて、旧来よりアビダルマ宇宙論をめぐって種々に論究せられてきたことは周知の通りである。

bhājana-loka という語は古代インドの諸文献 (Padma-Purāṇa 等の天上、地獄、地上篇にわたる物語) や原始經典 (世起經、長阿含卷一八・二二、大正一・一一四b―一四九c 等) をはじめとして広く認められるが、アビダルマ仏教ではこの bhājana-loka を形而上学的宇宙論の中核として展開させる。しかしこの宇宙論もアビダルマ独自の思想ではなく、むしろ古代インドにおいて展開されていたインド人の宇宙自然観に対する仏教的変容を物語るものである。本稿はその概要を『俱舍論』を中心として明らかにするところにある。

改めて論ずるまでもなく bhājana-loka とは容器 (bhāna; snod) としての世間 (loka; bhig-ten) の意味で器世間 (玄奘訳) 器世界 (真谛訳) と漢訳される語に相当する。そしてこの語は常に有情 衆生世間 (satvaloka; sams-cen kyi bhig-ten) と対比され、しかも一切有情の業力の所産として説かれる。それは宇宙の原因を超越的神格に求めたのに反する。⁽¹⁾『天使經』(A. i) のごときは

〔kaman の威力〕が人間の運命を支配すると同時に宇宙の形成過程に影響を及ぼすといったように説かれている。『俱舍論』が『世起經』をもとに発展したとみられる『世間施設論』等の所説 (cf. 大毘婆沙論卷二〇) に負っていることはすでに学者により指摘されている。以上いくつかの事例を列挙することによって、bhājana-loka の構想の基本的性格がいかなるものであるかを眺めてみることにする。

[A] 六因中の能作因 (kāraṇahetu; byed-rgyuh; rgyu) では明らかに業 (karma; jas) が器世間 (bhājana-loka; snod kyi bhig-ten) に対してその力を有すると説く。すなわち『また、能作因にも生ぜしめる力がある。ちようど十処が五識身に対して、また、諸業が器世間に対して「力があるように」。(angibhāvo'pi cāsti kārṇa-hetostadyathā "pañcasu vijñānakāyeṣu daśanāmāyatanāṃ bhājanaloka ca karmāṇāṃ)』。Yaśomitra は本文の (angibhāva) の語を勝因力 (pradhāna-bhāva; gcho-bohi dños-po) 能生力 (janaka-bhāva; skyed-par byed-pa) という意味に釈す。⁽²⁾これによれば、karma とは単に主体的行為を意味するばかりではなくその行為によつて及ぼされる残存力という一種特別の能力をも意味するところである。

[B] 宇宙創造の増上力に關して、『一切有情の業の増上力によつて (sasvasatvānāṃ karmādhīpatyena) 風輪 (vāyumaṇḍala) が生ずる…』。Yaśomitra は (karmādhīpatyena) を業の能力によつて (karma-sāmarthyena) の意味に釈す。⁽³⁾同様の表現は、『諸の有情の業によつて (satvānāṃ karmābhīr)』、『諸の有情の業の増上力によつて (satvānāṃ karmādhīpatyena)』、『諸の有情の業の威力

から生じた風によつて (satvānām karmaprabhāvasaṃbhūtaivā-yubhiḥ)》において散見される。

[C] 金宝等以後の器世間の生成に關して、『業の威力により起された風によつて (karmaprabhāvāt preṭitairvāyubhiḥ)』[D] 八熱地獄と八寒地獄に關して (sarve sattvakarmādhīpayaḥ) [E] 前述の二つを bhājana-loka の成立過程に關して (satvānām karmādhīpayaena bhājānām...) [F] 日月等の依住に關して、『一切の有情の共業の増上力によつて生ぜり (sarvasattvasādharaṇakarmādhīpāyanivṛtā)』等の諸事例によつてなるべし。bhājana-loka には有情の業の prabhāva, sāmānyā, āṅgabhāva, pradhāna-bhāva, janaka-bhāva, ādhipāya などといった語義によつて種々に展開するという独自の構想力をもつことが理解される。そのうち [F] の共業 (sādhāraṇa-karman; thun-mon gi las) 又はアビダルマ論師 (Ābhidharmaika) の見解によれば、『bhājana-loka の種々相は有情の協同的所産なり』という場合の意味で用ゐられる。これに対して『自己にとつての世界』とつた世界観 (Welanschauung) に属する立場にあつては、共業による bhājana-loka は、単なる通俗的な世俗倫理の形態論にすぎないであらう。しかしこの sādharāṇa-karman を社会的協同作業の所産と考えるならば、『個人と社会』に關する新たな理念を産出することができるであらう。我々自身、不可分離の關係にある社会のなかにあつて、常に人間的存在のあり方が問われるのは必然である。bhājana-loka によつて構築される仏教の世界観が果して存続し得るか捨て去らるべきかという問題は、現代世界における仏教の究極的価値とは何か、が問い糾されることを意味するのであらう。それがなければ現代の社会生活に

アビダルマ仏教における bhājana-loka につて

新しい方向を与えることは、至難といわねばならない。一方においては、この bhājana-loka をめぐるアビダルマの形而上学的宇宙論は觀念論 (idealism) と實在論 (Realism) の対立抗争をも予想せしめるものでもある。

一般に宇宙論 (Cosmology) は鬼神学 (demonology) 人類学 (anthropology) 神学 (theology) などと關係するとみられるが、神や人間の存在に係わる具体的問題に關して、①宇宙論、②有目的論、③存在論という三つの論拠が指摘されることも注意するべきである。

アビダルマ宇宙論の体系化は有情の救済信仰という実践徳目と不可分離の關係にあつたはずである。存在論的にも bhājana-loka は我々人間の存在に〈対してある〉存在ではなくて、むしろ〈ためにある〉存在ということができ、従つて対立的世界ではなく常に〈人間の交渉に係わる存在〉なのである。つまり、bhājana-loka は我々人間と没交渉には存続し得ないのである。それは、仏教が日常生活や活動のなかで輪廻転生の道と解脱 (mokṣa) の融即を求めることと呼応するであらう。

《瞑想的宇宙論》と称される禪定力 (dhyāna-prabhāva) による宇宙の展開も、すなわちアビダルマ仏教の修道と表裏一体であるといふことができる。

以上の事例を眺めるだけでも、今や、宇宙空間の神秘が否定されつつある現代にあつて、仏教の宇宙観をいかに理解すべきかという問題が、改めて我々の日常的体験に問をなげかけるものである。

(註は紙数の關係で省略する)